opusdei.org

属人区長の書簡 〔2014年6月〕

属人区長は6月の手紙で希望 の徳に焦点を置き、ドン・ア ルバロの言葉をもって祈りに 招きます。「主よ、私に信頼 しないでください。私は御身 に信頼します。」

2014/06/08

愛する皆さん、イエスが私の娘たち と息子たちをお守りくださいますよ うに!

この日曜日の聖霊降臨の祭日後、典 礼暦は年間節一これも喜ばしい一に 戻ります。教会は、聖性の戦いの本 命であるいつもの諸義務を熱心に果 たし続けるよう望んでいます。ここ 数週間に受け取った天の励ましを活 用しましょう。罪と死に打ち勝った キリストの勝利、その栄えある復活 と昇天、聖霊の派遣について考察 し、真の目標である天国を目指して この世の歩みを続ける新たな力を頂 きました。聖ホセマリアは、教会の 偉大な伝統に従って、聖霊降臨に続 く聖三位一体の祭日前の三日間、賛 美と感謝の賛歌Angelicum Trisagiumを唱えるよう勧めました。 Tibi laus, tibi glória, tibi gratiárum actio, in sæcula sempitérna, o beáta Trínitas^[1]; 永遠に至るまで、 御身に替美、御身に栄光、御身に感 謝、おお、至聖なる三位一体よ。

日常生活を超自然のレベルに高めつ つ神の完全な喜びに至ることを熱望

神に思いを馳せて全ての仕事をする のを大いに助けてくれるのが希望で す。ドン・アルバロがご聖櫃や聖情を に向けるまなでしには深いて工を 信心がこもっていました。 イストがご聖体に現際に現てエされる また聖母の母としてって ある感謝し、信仰による 慮を心から感謝し、信仰による に味わっておられました。 こので味わっておられました。 世では鏡を通してのようにぼんやいと神を観想することは顔をあることのというできます。 ですることがでいいでではいいでででででででででででででででででいいででででいる。 でするではいいでではいいでででででででででででででででででいる。 ですのようととででいいではいいででいいではでいいでででいる。 者でいたのはでいるではいたのではでいたのです。 とではないたのです。

皆、主のおそば近くからついて行こ うと誠実に努めているとしてもされるとしているとい知らの限界を思いは病気ののとい知らののではないに反対を明まるがです。 毎日ではならないのではないではならないのではならないのではならないのではならにないがです。 実践する機会になりまではいまする機会にないまする機会にないまする機会にないます。 実践であることばで決意を新た にしてください。譲歩はすまい、怠惰やものぐさに足をすくわれまい、希望に満ちて楽観的な心で日々の義務をしっかり果たそう、と。小ぜりあいに敗れることがあっても、信実の愛の行為をするならば、失敗を克服できると確信しつつ。」[4]

イエス・キリストの弟子は、絶えず 否定的な表現をしたり、内なる幸せ への望みを否定したりする人であっ てはなりません。そればかりか、教 皇ベネディクト16世が述べられたよ うに「わたしたちは日々を歩んでい くために、(…) 希望を必要としてい ます。| 「5」このように回勅で「人間 は毎日、小さな希望から大きな希望 まで、様々な希望を抱きます。この 希望は人生の異なる時期に応じてさ まざまです | ^[6]と、希望は、目標を 定め、この世の歩みを続けることを 助けると言明しておられます。 度々、来世への希望には目を向ける

ことなく、この世のことだけを望ん

で全てが計画されています。特に、 若者たち、実社会での歩みを始めた ばかりの人たちに見られることで す。多分、それで蜃気楼のようなつ かの間の喜びを体験するでしょう。 しかし、その計画が失敗に終わった り、望みどおりに事が運ばなかった りすると、「実際にはそれがすべて ではなかったことが明らかになりま す。人間はそれ以上の希望を必要と することが明らかになります。自分 を満たしてくれるのは無限のものだ けだということが明らかになりま す。無限のものとは、自分が手に入 れることのできたものを常に超える もののことです。(…)この偉大な希 望は、神以外にありえません。神は 全宇宙を包み、私たちが自分だけで は手に入れることのできないものを 私たちに与えてくださるからで す。| [7]

9月27日のドン・アルバロの列福式までの数ヶ月間、神に忠誠を尽くし

た前任者の面影を偲ぶことを楽しみ にしています。聖ホセマリアの模範 と教えを忠実に継承しましたが、天 国の幸せを熱望することにおいても そうでした。この世においては幸せ な人として楽観的に過ごしました。 超自然徳の希望を愛し、毎日神によ り頼んでおられました。私も度々、 創立者に聞いていた言葉をドン・ア ルバロは射祷として使っておられま した。それは、特に自分の弱さとか 限界とかをひしひしと感じるとき、 神への信頼を深めるため非常にふさ わしいものでした。「主よ、私に信 頼しないでください。私は御身に信 頼します。」また、助言を仰ぐ人、 特に自分の過ちや欠点に打ちひしが れて、恩恵に応えることはできない と考えてしまっている人にもこの射 祷を勧めていました。神に全幅の信 頼を寄せるよう皆を励まし、それと 同時にできるだけの手段を講じるこ とを勧めておられました。

主は常に私たちの必要としているこ とに目を留めておられる事を確信 し、オプス・デイ創立者のあの勧め を考察することです。「子供たち よ、急ぎ活動し、実行しなければな りません。正しい価値観と勇気、生 きる喜びをもって。愛は恐れを自分 から締め出すものです(Iヨハネ4,18 参照)。大胆に、恥ずかしがらずに (…)。避けなければならないこと は、力が有り余っていると信じて、 向こう見ずな行動を取ったり、自分 の力では乗り越えることなど出来な い障害だと考えて、臆病にも委縮し てしまうことです。

しかし、愛があるなら全て旨くいくことを忘れないで下さい。出来るだけのことをする人に、Deus non dénegat grátiam; 神が恩恵を拒まれることはありません。」[8]

ドン・アルバロが些細なさまざまな ことを希望を強めるため、いかに役

立てておられたかを示す1960年代の あるエピソードが思い出されます。 創立者に小さな写真に何か書いてく ださいと何度もお願いしたことがあ ります。聖ホセマリアは子としての 執拗さに負けて、次のような詩篇の 一節を記しました。Hómines et iuménta salvábis, Dómine^[9]; 主よ、 あなたは人々をも口バをも救われ る。この聖書の一節を思い出された のは、度々、黙想しておられたから でしょう。神の御前に侍るロバだと 自分のことを思っておられたのです から。創立者はその時ドン・アルバ 口のことを考えたのではないでしょ うか。神に託されたオプス・デイの 任務を果たすことを喜んで手伝って いたこの息子の愛情と逞しさを思い 出しながら。日付を書く際、記され た聖句を読んだドン・アルバロは、 自分の苗字ポルティーリョ(扉とい う意味)に関連付けて、「これは希 望への扉を開く一節だしとコメント しました。聖ホセマリアは、その

ユーモアのあるすばやい対応が気に 入り、そのコメントを写真に書き加 えたのでした。

創立者は、オプス・デイのある祝日 の説教で主に次のように話しまし た。「イエスよ、私の神であられる 御身は、私の兄弟、私の愛、私の全 てであられます。どうしてあなたを 信頼せずにおれましょうか。どうし て希望を強めないでおれましょう か。そうです、子供たちよ、物質的 なことにいたるまで、父なる神のみ 摂理を全面的に信頼させてくれる正 当な理由を確信しましょう。このよ うに主の導きのもとに歩んでいると 確信すると、再び、私たちは深くへ りくだらざるを得ません。しかし、 このへりくだりは信頼をもち、感謝 に溢れていることのしるしです。| [10]

主が私たちへの特別な愛によって多くの試練を送られたことは事実で

す。それによって私たちは希望を再 確認しました。私たちを罪からあが ない、ご自分の子供にしようと、愛 する御子を世に遣わされた驚嘆すべ きことを考えるだけで十分でしょ う、聖霊は教会にいつも留まって、 働いておられます。その聖霊が、聖 性の手段一秘跡、とりわけご聖体と ゆるしの秘跡―を通して、また私た ちの母でもあるその御母のご保護の うちに、そして喜んで犠牲を厭わず 主に応えた多くの人たちの模範を通 して私たちのもとにお出でになり、 天国をますますよく見つめるように 後押ししてくださいます。歴代の教 皇様や教父方が確言されているよう に、特に祭壇で表敬している聖人方 や福者方が私たちを励ましてくれま す。これもまた、一人ひとりが聖性 を望むことの出来る紛れもない証拠 です。

今月、聖ホセマリアの祝日を祝いま す。聖ホセマリアは、日常の諸義務

度々ある人々一女性や男性一は、この招きが〈心にしみ込まない〉とあきられます。しかし、あきらめきといるに祈り、愛情深い付きないを続けることです。教皇フランスコが使徒的勧告Evangélii gáudium,で述べていらっしゃることを自分に当てはめ、全ての人まなとですることを覚び取ることにもよりによったがあるような人になるような人にながめば重い十

字架になることがあります。しか し、まさに十字架において主は、私 たちのために生ける命の泉になるた め全てをお捧げになったのです。希 望が奪われないようにしましょ う。| ^[11]必要なことは「現代の人々 に神の救いを告げ知らせ、導くこ としです。「度々、道に迷う人々 は、励ましてくれる、つまり希望を 与え、人生途上で新たな力を与える 答えを必要としています。教会は、 無償の慈善所、つまり全ての人に とって、受け入れられ、愛され、ゆ るされていることが実感され、福音 に沿ったよい生活をするよう励まさ れる所でなければなりません。| ^[12]

ドン・アルバロは、希望のおかげで 困難にたじろぐことはなかったので す。オプス・デイに所属し始めた 1935年以降、神が常に共にいてくだ さることを確信して、絶えず楽観的 に使徒職を実行しました。このよう な態度で最期まで堅忍されたので す。さまざまな理由で近づく人々 を、祈りの中に組み入れ、家族とか 仕事などに関心を寄せ、また霊的な 勧めをしないで…去らせる事はあり ませんでした。人々の社会的な地位 を云々することはなく、主が傍らに おかれた人の霊魂だけを見ておられ ました。ビルの守衛さんや聖座のあ る部署の用務員さん、旅行中の機内 の客室乗務員とかパーサーなど。ま た教会とか市民社会で権威ある人た ちに対しても同じように振る舞われ ました。高齢であったり、社会的に 著名だったりする人たちに対しても そうでした。どんな場合でも偽りの 世間体に煩わされることはなかった のです。偶然にしろ計画的なもので あるにしろ、出会いは主のみ旨であ ることを確信して接していました。 聖ホセマリアの模範から学んだこと です。

1972年、ドン・ホセマリア・ヘルナンデス・ガルニカは帰天前に、ド

ン・アルバロの「大胆さ」一司祭叙 階前一にびっくりした思い出を書き 残したいと考えました。それは、枢 機卿や司教、政府の要職についてい る人や地方の権威者を前にして手続 きを進めなければならなかった時の ことです。ドン・アルバロの伝記作 者の一人は、ドン・ホセ・マリアが ドン・アルバロに、そういう類の任 務は、自分には不適当で、自信がな いと思ったりしないか、と尋ねたこ とを記しています。その答えは神へ の信仰と創立者の模範に対する信頼 に満ちたものでした。「大漁の奇跡 が起こる前のペトロの言葉を思い出 します。in nomine tuo, laxábo rete 『お言葉ですから、網を下ろしてみ ましょう。』 パドレが私に言ったこ とに従う時、それは神に従うことだ と分かっています。| ^[13]

列福式の日が近づいている今、ド ン・アルバロの取次ぎを確信し、楽 観的に使徒職を続けるための希望の 徳を主から獲得してくださるようお願いしましょう。特に、司祭叙階70周年に当たる6月25日は、それにふさわしい日です。その日一緒に叙階の秘跡を受けたドン・ホセ・マリア・ヘルナンデス・ガルニカとドン・ホセ・ルイス・ムスキスの列福調査も進行中です。

私は14日に、み旨なら一つ年を取り ます。私がオプス・デイの聖なる牧 者・聖ホセマリアとドン・アルバロ の模範を忠実に辿ることが出来るよ う主にお願いしてください。引き続 き日々、教皇様と聖地へのその司牧 旅行の実りのため熱心に祈ってくだ さい。主が、平和とキリスト信者の 一致のための教皇様のお祈りを聞き 入れてくださいますように。オプ ス・デイの使徒職の進展をしっかり 見据えてください。つい先日、シン ガポール、台湾そして韓国を巡り、 偉大なアジア大陸で、オプス・デイ の精神に沿ってキリストの教えを伝 えるすばらしい仕事をしている皆さんの兄弟姉妹を励ましてきました。 彼らが携わっている全ての使徒職 に、熱心な聖徒の交わりで日々寄り 添うようお願いします。何と多くの 人が福音の訪れを待っていることで しょう。

私の義務とはいえ、6月26日の記念日について詳述するつもりはありません。神に仕えたいなら聖ホセマ・創立者をより深く愛し、一日たりとも一ある手紙にあるように一「私たちの僅かな事柄」を報告しない日がないようにしましょう。私たちの全生活に関心をお持ちですから。

心からの愛を込めて祝福を送りま す。

皆さんのパドレ

†ハビエル

ローマ、2014年6月1日

- [1] Angelicum Trisagium.
- [2]詩篇 26[27],8 (Vulgata).
- [3]コリント13,12参照
- [4]聖ホセマリア、「神の朋友」217番。
- [5]ベネディクト16世、2007年11月 30日回勅「希望による救い」31番。
- [6]同上30番。
- [7]同上30,31番。
- [8]聖ホセマリア、2007年5月6日手 紙44番。
- [9]詩篇35[36],7.

[10]聖ホセマリア、1937年4月10 日の説教のメモ"Crecer para adentro" p.42.

[11]教皇フランシスコ、2013年11 月24日「使徒的勧告」Evangelii gaudium, n.86.

[12]同上114番。

[13]サルバドール・ベルナル、 「アルバロ・デル・ポルティーリョ の思い出」第6版p.96.

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/shuren-qu-chang-noshujian-2014nian-6yue/ (2025/12/17)